四川唐門考

―武俠小說と評書『雍正劍俠圖』『三俠劍』

岡崎由美

はじめに

近現代武俠小說で描かれる武藝觀や個々の武術の技、江湖や武林の習慣、掟などは、娛樂小說の趣向として、作者の個性的な發想や獨自の創作に據りながらも、ジャンル全體で共有する基本的な設定も少なくない。それは一つには、時代考證ははなはだ不正確であるにせよ、武俠小說が多かれ少なかれ中國の傳統文化および傳統文化に對する通俗的イメージを共有することで成り立っているためであり、一つには、先行作品が創造した趣向や設定を繼承し、換骨奪胎を繰り返してきたからである。例えば、冒頭に擧げた「武林」という言葉は、中華民國時期に武藝者の世界を指すものとして作られた新語であるが、現在では武俠小說の用語として廣く用いられ、定着している。[1] また、特に武藝の技や流派、祕密結社の名稱やその設定などは、特定の作家が作り出したものが武俠小說の共有財產となることが珍しくない。

武俠小說に共有されるそうした設定の最も著名な一つに、「四川唐門」がある。「蜀中唐家」などともいい、四川重慶郊外の唐家堡に數百年續く武藝の舊家で、暗器と毒藥を研究考案し、かつその使い手として天下一と稱される神出鬼沒の一族である。「暗器」とは、隱し持っていて敵を奇襲する武器の總稱であり、主に飛び道具を指すが、目潰し砂を浴びせたり、毒藥を噴霧したりする技や仕掛けのある器具も含む。つまり四川唐門とは、武器の發明家であり、漢方醫學の專門家なのである。むろん虛構であるが、複數の作家が異なる作品の中にこの四川唐門を登場させ、その存在は膨大な武俠小說愛讀者の共通の知識となっている。

武俠小說も小說である以上、個々の作品のテーマや敍述構造や文章描寫を考察することは當然大切であろうが、あくまで大衆娛樂小說であるこのジャンルは、案外こうした印象的な趣向や設定が作品から離れて一人歩きし、映畫やコミックなどのサブカルチャーへマルチメディアに浸透することにより、小說の生命を保っているところもある。

「四川唐門」という趣向の發端が、一冊の武術書の記載に關係することはすでに指摘されているが、しかしそれはどのようにイメージをふくらませたのだろうか。ここでは、武俠小說の着想をはぐくむ時代背景という觀點から、「四川唐門」をモデルケースとし、主に武術書『武術匯宗』と民國時期の俠義評書『雍正劍俠圖』と『三俠劍』を對

象として、武俠小說を巡る發想の共鳴を整理してみたい。

一．新派武俠小說における四川唐門および類似の趣向

現在、四川唐門が人口に膾炙しているのは、戰後の武俠小說、いわゆる新派武俠[2]がさまざまな作品に登場させたことによるものある。まず新派武俠の開祖と稱される梁羽生が複數の作品でこの名を取り上げ、さらに臺灣の人氣武俠作家古龍が設定に詳細な肉付けをして流布したようである。

以下に、梁羽生と古龍の作品の中から幾つか例を選んで擧げておく。

梁羽生『七劍下天山』第六回（一九五六―一九五七『大公報』に連載[3]）

龍郁芳認得這是四川唐家獨創的暗器蝴蝶鏢，暗暗驚奇，這少年年紀輕輕，竟然會用這樣奇形暗器。

（これは四川唐家が獨自にあみ出した暗器、蝴蝶鏢だと悟って、龍郁芳はひそかに驚いた。この少年は年端もゆかぬのに、このような奇怪な暗器を用いるとは。）

梁羽生『牧野流星』第四十回（一九七二―一九七五『新晚報』に連載）

「鍾長老所料果然不差，這妖人姓唐，自必是川西唐家的人了。」唐家號稱天下暗器第一家……（以下略）〃

（鍾長老の推測はやはり間違っていなかった。この怪人が姓を唐というなら、川西唐家の者に違いない。唐家は天下一の暗器を誇っている……[4]）

古龍『白玉老虎』第四章「毒藥與暗器」（一九七六年[5]）

〃蜀中唐門〃并不是一個武功的門派，也不是一個祕密幫會，而是一個家族。

可是這個家族却已經雄踞川中兩百多年，從沒有任何一個門派任何一個幫會的子弟門人，敢妄入他們的地盤一步。因爲他們的毒藥暗器實在太可怕。

他們的暗器據說有七種，江湖常見的却只有毒針、毒蒺藜，和斷魂砂三種。

雖然只有三種，却已令江湖中人聞風而喪膽，因爲無論任何人中了他們的任何一種暗器，都只有等死，等着傷口潰爛，慢慢的死，死得絕對比其他任何一種死法都痛苦。

他們的暗器并不是沒有解藥，只是唐家的解藥，也和唐家的毒藥暗器一樣，永遠是江湖中最大的祕密之一，除了唐家的嫡系子孫外，絕對沒有人知道它的祕密，就連唐家的嫡系子弟中，能有這種獨門解藥的，也絕對不會超過三個人。如果你受了傷，你只有去找這三個人才能求到解藥。

（「蜀中唐門」とは武藝の流派でもなければ、祕密結社でもなく、一家族である。

しかしこの家族は、四川に二百年餘りも家名を誇り、いかなる流派や結社の門弟も、彼らの縄張りに足を踏み入れようとはできなかった。彼らの毒藥暗器が餘りにも恐るべきものだったからだ。

彼らの暗器は七種あるとの噂だが、江湖でよく見るのは、毒針、毒蒺藜、斷魂砂の三種のみである。

三種のみだが、江湖の人閒をその名を聞いて震えあがらせるには十分だった。なぜなら、誰であろうと、彼らの暗器のどれかにあたったが最後、死を待つしかないからである。傷口が膿み爛れ、緩慢な死を待つのだ。それは閒違いなくどんな死に方よりも苦しい死である。

彼らの暗器に解毒藥がないわけではないが、唐家の解毒藥のみであり、これも唐家の毒藥暗器同樣、永遠に江湖で最大の祕密の一つであった。唐家の直系の子孫以外、この祕密を知るものは斷じていない。唐家の直系の子弟の中ですら、この家傳の解毒藥を持つことができるのは、決して三人を超えることはないであろう。もしも傷を負ってしまったなら、この三人を訪ねていかぬ限り、解毒藥を求めることはできないのだ。)

古龍の『白玉老虎』では、このような設定に加えて、主人公が「唐家堡」に潛入するくだりでは、その內部の樣子や組織の仕組みも描寫しており、武俠小說における「唐門」の共有知識はおよそこの作品が基本になっているといえる。

また、梁羽生は、四川唐門に類似した「巫山派」なる四川の武藝流派も登場させている。

梁羽生『廣陵劍』第三十四回(一九七二―一九七六『商報』に連載)

葛南威緩緩說道:「你們可聽過巫山幇的名字麼。」

雲瑚驚吃了一驚,「你說的是擅於使用毒藥暗器的巫山派?江南雙俠剛剛和我們談過這個巫山派的來歷。」

葛南威道:「不錯。這枚蝴蝶鏢正是巫山幇女幇主巫三姐的獨門暗器。」

(葛南威がおもむろに言った。「お前たち、巫山幇の名を聞いたことがあるだろう」雲瑚はぎょっとした。「あの毒藥暗器を得意とする巫山派のこと?江南雙俠がついさっき巫山派の素性を話してくれたのよ」葛南威は言った。「いかにも。この蝴蝶鏢はまさしく巫山幇の女頭領、巫三姐獨自の暗器だ」[6])

四川を根據地とする毒藥暗器の使い手、唐氏という設定は同じである。また、使用する暗器はいずれも蝴蝶鏢としている。

梁羽生と竝び稱される武俠小說界の泰斗、金庸は自作中に「四川唐門」を使用していないが、『倚天屠龍記』に「東川的巫山幇」を登場させている。名稱のみを流用したものか、存在感のない脇役に過ぎないが、このように唐家に限らず、「四川の毒藥暗器一門」のイメージが展開される中、「四川唐門」は最も人口に膾炙したのである。

二、白羽と『武術匯宗』

以上のように、現在「四川唐門」という趣向が讀者の閒で廣く共有されているのは、いち早く梁羽生が取り上げ、古龍が詳細な基本設定を提供し、さらに溫瑞安を初めとする次世代作家らが使用を繼承したことによるもので、新派武俠小說の流行が作り出したものであろうと思われていた。

これに對して、「四川唐門」出現の源流を考察した葉洪生は、白羽(一八九九―一九六六、本名宮竹心)の『十二金錢鏢』(一九三八年よ

り天津『庸報』に連載）が嚆矢であろうと指摘した[7]。

『十二金錢』第十六回[8]で、一塵道人が四川なまりの刺客に襲われ、暗器「毒蒺藜」によって命を落とす。第十七回、一塵道人の弟子秋原道人が師匠の訃報に接する場面は、

秋原道人皺眉苦思，想不出仇人是誰。只曉得這毒蒺藜是四川唐大嫂的獨門祕傳；而賊人又是四川口音，揣想仇人必是四川綠道的人物了。（秋原道人は眉を顰めて考え込んだ。仇の正體を思いつかないのだ。ただ、この毒蒺藜が四川唐大嫂の祕傳であるのはわかった。さらに、賊は四川なまりでもあったから、仇は四川の綠林の人物に違いないと察したのである。）

と描寫されている。

さらに葉氏は、「四川唐大嫂」の名が、武術家萬籟聲（一九〇二―一九九二）の著書『武術匯宗』（一九二八年）に見られることを指摘し、「如非揑造，則四川唐大嫂至少是存在於清末民初而實有其人。於是四川唐門用毒之名，天下皆知；而首張其目用於武俠小說者，正是白羽。（もしこれが揑造でないなら、四川唐大嫂は清末民初に實在した。そこで四川唐門の毒藥使いの名は天下に知れ渡るのだが、それを最初に武俠小說で用いたのは正しく白羽である）」と結論づけている。

萬籟聲は、湖北武漢の出身。一九一八年北京農業大學に進學し、趙鑫洲に少林武術を學び、さらに杜心五、劉百川ら著名な武術家に師事した。一九二八年冬、中央國術館主催の全國武術對抗試合に、北京農業大學ＯＢとして參加、その後各地の國術館の館長や大學の體育科教授を歷任し、晩年は福建省武術協會副主席を務めた。『武術匯宗』は一九八四年北京中國書店により影印出版されているが、その「再版自序」によると、本書の初版は一九二八年である[9]。

當時は、中國傳統武術の普及と近代化を圖る聲が上がり、各地で武術學校や體育會が組織されたり、全國的な武術試合が開催されたりした時期である。一九一〇年代から二〇年代にかけて、『武俠叢談』（一九一六年）、『技擊餘聞』（一九一七年）、『劍俠駭聞』（一九一七年）、『拳術見聞錄』（一九一九年）、『清代劍俠奇觀』（一九二二年）、『拳師傳』（一九二四年）、『南北奇俠傳』（一九二六年）など、古今の劍俠、拳師の逸話を取り上げた筆記小說が續々と刊行されているのも、そうした時代の流れであろう。

『武術匯宗』もまた中國武術の普及を目的としたもので、內容は上編「外功」、中編「器械學」、下編「內功」に大別され、個々の武藝の招式や訓練法を寫眞入で解說している。また、下編には「餘談」として、「一　行俠概論」「二　鏢師與江湖」という項目もあるが、これは萬籟聲が師事した趙鑫洲や杜心五が鏢師を務めて天下を往來した經歷があることから、彼らの體驗に基づくものではないかと思われる。なお、馮育楠による白羽の傳記小說『泪洒金錢鏢―一個小說家的悲劇』（一九八六年、江蘇文藝出版社）では、白羽に『武術匯宗』を紹介したのは、同じく武俠小說作家の鄭證因であるという。

本書において、葉洪生が指摘した「四川唐大嫂」の名は、下編第六章第七節「神功概論」に以下の通り見られる。ただし、現在のところ、これ以外に「四川唐大嫂」に關する資料は見當たらない。

有操五毒神沙手者[10]，乃鐵沙以五毒煉過，三年可成。打於人身，即中其毒，遍體麻木，不能動彈，挂破體膚，終生膿血不止，無藥可

醫，如四川唐大嫂卽是！（五毒神沙手を用いる者があるが、これは鐵沙を五毒によって修練するもので、三年で達成できる。人の體を打つと、その毒にあたり、全身が痲痺して身動きできない。皮膚を破ると、終生血膿が止まらず、つける藥がない。四川の唐大嫂のごときがまさにこれである。）

武俠小說には「五毒神砂」という、毒物を含んだ目潰し砂の如き暗器がしばしば登場し、これも白羽がいち早く『十二金錢鏢』[11]で用いている。その名稱も、『武術匯宗』の「五毒神沙手」から得たのかもしれぬが、ただし萬籟聲が記述している「五毒神沙手」は、暗器ではなく、「沙手」と呼ばれる拳術の技である。

『武術匯宗』では、上編第一章「拳術」第四節「武術根基功夫練法（三）插沙」の項でも「五毒神沙手」に言及している。本書によれば插沙は、豆や鐵沙を盛った桶に手を插し込み、指の勁力を鍛える鐵沙掌の訓練法の一つである。

其以五毒藥水練成者，名爲五毒神沙手，余均知之，不過今日殊用不上耳！此功邊省人多習之，故拳諺謂：「南方多桶子，北方多八式，川湘多沙手也！（これを五毒藥水で修練するものを、五毒神沙手という。私はいずれも知っているが、今日では特に用いられないだけである。この技は邊境の人が習うことが多く、ゆえに拳術の諺に「南方は桶子が多く、北方は八式が多く、四川湖南は沙手が多い」というのである。）

このように、ネーミングの際に『武術匯宗』から着想を得たにせよ、『十二金錢鏢』で、「五毒神砂」なる暗器を用いたのは、白羽の創作であろう。

「沙手」の名は、清代俠義小說にも見られる。清の道光年間の『綠牡丹全傳』（一名『四望亭全傳』）の第三十八回に、

鮑自安道：「此非器械所傷，乃手傷也。用巨桶盛鐵沙三斗，幼年閒以手在內插操，久則成功。人碰一下，筋痲骨酥，此手名爲沙手。」（鮑自安は言った。「これは武器で傷ついたのではなく、手による傷だ。大きな桶に鐵沙を三斗盛り、幼いころから手を中に插し込んで修練すれば、長い閒に達成する。人がちょっと觸れると筋骨が痺れてしまう。これを沙手というのだ」）

とある。さらに、徐珂『清稗類鈔』[12]「技勇類」に、「眇僧用五毒功」という一篇がある。以下に要約する。

嘉慶の頃、湖州の濮煥章は名の知れ亘った拳師であったが、年老いて隱居していた。その隣家に沈大というならず者の魚屋がおり、ある日、外來の商人の護衞をしてきた二人の少年と諍いを起こし、二人を痛めつけてしまう。一年餘り後、沈のもとへ、片目で足を引きずったみすぼらしい僧侶が物乞いに來る。うるさがった沈が毆りかかると、僧はひらりとかわし、指二本を揃えて沈の腕を押さえ、門の外まで引きずり出して、走り去った。たまたま戶口でこれを見ていた濮煥章が、僧の後を追いかけて、沈に恨みでもあるのかと尋ねると、僧は少林寺から來たといい、先年沈に痛めつけられた二人の少年は自分の弟子であるという。そして命が惜しければ、明日の正午までに訪ねて來るよ

う沈に傳えてくれという。少林寺僧がいうには、沈に施した技は「五毒功」といい、異人に傳授されたもので、尋常の武藝にはないものである。五毒功は、百足や蝮などを集めて最も毒性の強いものを藥と調合して飲み、その毒氣を皮膚に深く染み透らせる。この武藝を習得すると、指一本肌に觸れただけで、七晝夜後には皮肉が溶け崩れて血膿となり、つける藥はない。しかし、僧はそれを治す祕藥を持っているのだという。濮からこの話を聞かされた沈は半信半疑だったが、やがて僧に押さえられた腕に痒みを覺え、掻き毀した傷口から黑ずんだ血膿が滴るに及んで恐怖にかられ、僧のもとへ驅けつけて命乞いした。僧は沈に說敎したのち、おもむろに丸藥を與えて飲ませると、「治ったぞ」といった。沈の傷は癒えたが、傷口には黑い毛が密生し、切っても切っても生えてくるのだった。

『武術匯宗』の「五毒神沙手」は、むしろこの「五毒功」に近い。ちょっと觸れるだけで體が痲痺する、威力の凄まじいものは毒氣を帶びて皮肉が溶け崩れる。こうした「神功」の傳承は、『武術匯宗』を待つまでもなく、民閒に舊時流布していたのであろう。

以上のように、『武術匯宗』は「四川唐大嫂」を毒藥使いの名手として武俠小說に着想を提供してはいるが、暗器には言及していない。白羽や古龍が四川唐門の暗器の代表格として描いた「毒蒺藜」も『武術匯宗』の暗器の項には見られない。[13] それは作家の創作なのであるが、それでは、『十二金錢鏢』の唐大嫂やその後の四川唐門が暗器と結びつく發想はどこから來たのだろうか。

三　評書『雍正劍俠圖』および『三俠劍』

庚子事變の後、北京から難を逃れた評書藝人が天津に流れ、二十世紀初頭の天津の書場はにぎわった。その頃流行した評書は俠義ものが少なくなく、人氣を博したものに『雍正劍俠圖』と『三俠劍』が含まれる。『中國曲藝志・北京卷』によれば、『雍正劍俠圖』は、一九二〇年代、評書藝人常杰淼が編纂、初演し、後に『新天津報』に連載され、一九二八年から一九四三年にかけて分卷で續々と出版された。また、『三俠劍』は、說書藝人張杰鑫が評書『清烈傳』を底本として再編し、一九一六年から『明清八義三俠劍』と題して上演したもので、これも『新天津報』に連載され、一九三〇年代に出版された。

『雍正劍俠圖』は、北京師範大學出版社が同學圖書館所藏本により一九九二年、『雍正劍俠十三部』と題して出版している。全百八十七回、未完である。內容は、主人公「鎭八方紫面崑崙俠」こと童林、字は海川が山中で修業した後、ベイレ胤禛（後の雍正帝）に目をかけられて活躍するさまを描いたもので、雲南九宮連環寨の盜賊によって盜まれた御物鴛鴦鐲の行方を追う物語と、四川劍山蓬萊島を根城とする英王富昌による王朝轉覆の陰謀に立ち向かう話がかなりの部分を占め、また天下の武藝者を集めて腕を競う打擂臺の趣向も一度ならず盛り込まれている。もとが評書のためか、毎回新たな人物が登場して事件が起こり、およそ俠義小說でありがちな趣向はほとんど用いているといえる大長編である。また第百五回には、『兒女英雄傳』の登場人物何玉鳳と鄧九公の名が見えるなど、著名な先行作品を援用したサービスも見られる。なお、實在する童海川は嘉慶年閒の人で、八卦拳の祖とされる人物である。

『雍正劍俠圖』の注目すべき點は、武藝の技や招式が細かく多様に描かれていることである。近現代武俠小說の武藝方面に影響を與えた俠義小說としては、『七俠五義』やその續書『小五義』、『續小五義』など一連の系列が知られており、點穴や暗器、劍訣、輕功などの趣向が見られる。また、『七劍十三俠』（一九〇八年）も武藝の描寫は豐富で、點穴、輕功、內功などのほか、「壁虎遊墻功」など武俠小說で馴染み深い技が見られる。

しかし、『雍正劍俠圖』はそれらの比ではない。劍術、刀術、拳術、腿術、輕功（飛毛腿）、點穴、暗器、內功などほぼ網羅的に取り上げ、かつ招式も極めて豐富で、しばしば技の詳細な訓練法にも描寫が及んでいる。また、「鶯眉刺／蛾眉刺」や「點穴橛」、「子母鴛鴦鉞」、「蓮花奪」、「鹿筋藤蛇棍」などのいわゆる「奇門兵器」も續々と用いられ、これらは後の武俠小說でも繼承あるいは應用されている。[14]

毒藥については、第十回における南俠崑崙道長こと司馬空の毒藥製造のくだりが最も詳細に紙幅を割いている。司馬空はもともと毒藥鏢と毒藥袖箭も使えたが、毒藥は俠名にふさわしくない技だ、と封印した。それは仙鶴頂上紅、金星蛇の舌先の血、鯊魚の尾びれの毒針であった。その效き目は以下の通りである。

① 仙鶴頂上紅：この毒を塗った暗器にやられると、體中が痲痺する。
② 金星蛇：十二時間の間に毒が心臟に回り、死ぬ。
③ 鯊魚：傷口が黑くなり、體が膿み爛れて死ぬ。

こうした描寫の意義は、早期の俠義小說にくらべ、藥の名稱や藥材、效用の多樣化、差異化が進んでいることであり、後世の武俠小說が作品を印象づける賣り物の一つとしてさまざまに奇矯な毒藥の趣向を競っていることに通じる發想がある。

問題の有毒な暗器については、「毒藥鏢」、「毒藥釘」、「緊背低頭毒藥袖箭」、「飛抓百練鎖」などが見られるが、暗器として使用する「毒蒺藜」は見當たらない。ただ第二十二回に「練子毒蒺藜錘」という武器が出てくる。「練子錘」の一種である。詳細な形狀は描かれていないが、名稱から見て、鎖の兩端に錘をつけ、錘には植物の蒺藜[15]の實のようにびっしりと棘がつき、さらに毒を塗ってある武器であろう。其の使用法については、「（陸豐）遂將練子毒蒺藜錘向李英一掄，這一招兒名叫梨花落瓣」と描寫されていることから、練子錘の使用法通り、鎖を振って敵に打ちあてるものと思われる。[16]

そもそも兵器の「蒺藜」とは、木製や金屬製の棘のついた障害物で、軍隊が退却する際、敵の追擊を遮るため、あるいは籠城の際、敵の接近を阻むため、廣範圍に亘って土中や堀に埋めて使用するものであった。

先布鐵蒺藜大順城旁水中，騎渡水多躓，驚言有神。（まず鐵蒺藜を大順城の堀に撒いたところ、騎馬は水を渡る際に多くが躓き、怪かしだと驚愕の聲が上がった。）

（『宋史』卷三百二十八「蔡挺」）

布鐵蒺藜自塞歸路。（鐵蒺藜を撒いて自ら歸路を塞いだ）

（『宋史』卷三百六十四「韓世忠」）

金人恃居庸之塞，冶鐵錮關門，布鐵蒺藜百餘里，守以精銳。（金人は居庸關を恃みとし、鐵の鎖を鍛えて門を閉ざし、鐵蒺藜を百餘里に撒き、精銳によって守った。）

（『元史』卷百二十「札八兒火者」）

建郭掘濠，布鐵蒺藜刺竹於外，城守大固。（城壁を築き堀を掘り、

その外に鐵蒺藜や竹やりを仕掛けて、城の守りを大いに固めた。（『明史』卷百六十五「陶魯」）

と史書にある通りである。

小說には、『水滸傳』第百十八回に「蒺藜骨朶」なる武器が出てくる。長い柄の先に蒺藜の實のように棘を植えた丸い頭のついたものである。また『西遊記』第九十回に、「那猱獅精掄一根鐵蒺藜，雪獅精使一條三楞簡，徑來奔打（かの猱獅精は一本の鐵蒺藜を振り回し、雪獅精は一振りの三楞簡を用いて、襲い掛かってきた）」とある「鐵蒺藜」も、軍馬を阻む障害物ではなく、「蒺藜骨朶」と同種の武器であろう。つまり、「蒺藜」は比較的古い小說では、鈍重な兵器であったものが、『雍正劍俠圖』では鎖をつけて振り回す武器になり、ついには近現代の武俠小說に至って、手裏劍のように擲つ武器に轉化していったといえる。現在見出したところでの、『十二金錢鏢』に先立つ「毒蒺藜」の用例はこの『雍正劍俠圖』である。

一方、『三俠劍』の方は、近年知的財產權訴訟により中國全土で名を知られた作品でもある。記錄[17]によれば、群集出版社と內蒙古少年兒童出版社が『三俠劍』の著作者を、もと評書家の單田芳の名で出版したことに對し、張杰鑫の遺族が著作權の侵害を訴えたものである。この裁判では、原告側からの證據物件として、「中華民國二十六年四月再版」、「本書著書新天津報小說編撰張杰鑫」と記載のある『三俠劍』の書皮が提出され、また、北京出版社から首都圖書館所藏一九四九年上海正氣書局再版本（著者名：張杰鑫）前六卷の書影が提出され、さらに、北京十月文藝出版社の『三俠劍』（張杰鑫著、一九九五年）と吉林文史出版社の『三俠劍』（張杰鑫著、一九九六年）は一九四九年上海正氣書局本（原三十七集）を使用したとの證言が提出されている。

『三俠劍』は、康熙年間を舞臺に、十三省總鏢局の鏢頭の神鏢將こと勝英、九頭獅こと孟凱、鎭三江こと蕭傑の三俠客と、金針道長こと艾蓮池、紅衣道姑こと張紫搏、大頭鬼魔こと夏侯商元の三劍客を指し、これが綠林の山賊の反亂を鎭めたり、朝廷による臺灣の平定に力を貸すといった活躍を描く。また、『雍正劍俠圖』が『兒女英雄傳』の登場人物を流用したように、本書でも『施公案』に登場する黃天霸の父黃三太がまだ若者の姿で登場し、勝英の弟子となっている。

『三俠劍』で注目すべきは、まず第四回の以下のくだりである。

金頭虎說道：「黃三哥，你沒聽勝三爺說過嗎？四大鏢頭，東路鏢頭石俊山，西路鏢頭錢士忠，北路鏢頭勝三大爺，南路鏢頭南俠老王靈。西路鏢頭錢士忠，祖居江蘇錢家堡，有一宗暗器，錢家門上獨傳，名爲藥喂毒蒺藜。你們看此者，形象與蒺藜相彷，這必是錢家門上的人，受了秦尤的蠱惑，前來與咱鏢行爲仇作對。紅旗李煜，你看守銀龍，我們前去請錢老頭去。」

（金頭虎は言った。「黃三哥、あんたは勝三爺がおっしゃるのを聞いたことがないかい？四大鏢頭というのは、東路鏢頭の石俊山，西路鏢頭の錢士忠，北路鏢頭の勝三大爺，南路鏢頭の南俠こと老王靈だ。西路鏢頭の錢士忠は、先祖代々江蘇の錢家堡に住み、錢家門祕傳の暗器がある。その名は「藥喂毒蒺藜」という。これを見てみろ。形が蒺藜に似ている。これは錢家門の人間が、秦尤に唆されて、俺たち鏢行の邪魔をしに來たに違いない。紅旗の李煜、あんたは銀龍を見ていてくれ。俺たちは錢の親父にお出ましを願いに行こう」）

蘇州府郊外で黄三太の仲間の蕭銀龍が、有毒の暗器に襲われ、藥石の效なく命旦夕に迫る。金頭虎こと賈明は、暗器の形狀から江蘇錢家門獨自の毒蒺藜だと判斷する。そして黄三太らは解毒藥を求めて、錢家堡を訪ねていくのである。このくだり、錢家を唐家に置き換えれば、四川唐門の設定そのものである。また、「毒蒺藜」は本書第六回にも出てくる。

さらに第七回にも、毒藥と暗器の一族が登場する。

這位老寨主姓蓋名溫升。他有一個姑娘，一個兒子，一個兒媳婦，他這姑娘名譽不佳，蓋老寨主佯作不知。白老寨主恐怕壞了山規，遂叫他去翠竹嶺把守那條道路。又派了五百嘍卒，跟隨蓋老寨主前去。父子離開了白老寨主，遂任意而爲，在翠竹嶺又招聚許多的綠林道。可有一宗蓋家獨門的暗器，名爲瘟黃錘，獨門一家的藥藥，獨門一家的解藥，傳兒媳婦，不傳姑娘。

（この老寨主は姓を蓋、名を溫升という。娘と息子が一人ずつと息子の嫁がいる。この娘は評判がよくないが、蓋老寨主は知らぬふりをしている。白老寨主は掟を破るのを恐れ、彼を翠竹嶺に遣ってそこの街道を守らせることにした。さらに五百の手下を蓋老寨主につけてやった。親子は白老寨主と別れると、氣ままにふるまい、翠竹嶺でもまた多くの綠林の連中を呼び集めた。蓋家には名を瘟黃錘という家傳の暗器一種と家傳の痺れ藥、解毒藥があり、これは息子の嫁に傳え、娘には傳えない。）

すなわち『三俠劍』には、毒藥暗器の專門家一族が二件登場するのである。蘇州錢家堡の錢家は毒蒺藜、江寧の蓋家は瘟黃錘と藥藥である。

『三俠劍』の刊行と『十二金錢鏢』の連載はほぼ時期を同じくしており、かつ『三俠劍』の刊行時には、口述に對して編集整理の手が加わっているため、二〇年代に書場で語られていたありのままを一言一句確認するのは困難である。從って、雙方の前後關係や影響關係も判斷し難い。しかし、少なくとも武俠小說における「四川唐門」の形成と前後して、評書の俠義ものにも「家傳の毒藥暗器を有する一族」が登場することは、指摘しておくべきであろう。

四、四川と毒藥

毒藥暗器の名家はなぜ四川の唐家なのか。『武術匯宗』の「四川唐大嫂」に基づいたからだと言ってしまえばそれまでだが、『三俠劍』が、毒藥暗器の名家を蘇州の錢家や江寧の蓋家としているように、四川の唐家ではない異なる設定を用いるものもある。四川と毒藥暗器の名家を結びつけるには、それなりのイメージの蓄積が背景にあるのではないか。

まず、白羽の武俠小說執筆參考書とおぼしい『武術匯宗』には、「四川唐大嫂」のみならず、毒藥と暗器を四川や雲南に結びつける記述が見られる。例えば、中編第三章第一節の（十二）「弓袖圈，袖蛋，鳥鎗術等等概述」では、

要飛刀：乃滇川遊民所用之暗器，不似前述之飛刀，柄長一握，刃八分耳，有如筆狀，用時閃於人後，而劃裂其衣，以裝門面謊人者也！（要飛刀は雲南・四川の遊民が用いる暗器である。前述の飛

刀とは異なり、柄の長さ一握、刃は八分のみ。筆のような形狀で、用いる時は背後から閃かせ、不意を突くのである。）

とあり、雲南四川の遊民が用いる獨特の暗器を紹介している。また、下編第六章「餘談一　行俠概論」では、「行俠之豫備與藥物」として、

至於藥物，有飲卽暈倒者，是蒙汗藥，有嗅而暈倒者，是名薰香，亦名悶香，均有專方，惟不易配，均須於川滇等省山中採之，書之亦無益，且恐不肖之徒，濫用施用，反爲不美！（藥物については、飲めば昏倒するものは蒙汗藥、匂いを嗅いで倒れるものは薰香、または悶香といい、いずれも專門の調合法があるが、たやすくはない。みな四川・雲南などの山中で藥材を採取する必要がある。それをここに書いても無益であり、よからぬ輩がみだりに用いては、かえってためにならぬであろう。）

と述べている。萬籟聲の師杜心五は、鏢師時代四川、貴州を往來しており、[18] 見聞が特に豐富であったのかもしれない。白羽が『武術匯宗』を參考にしたのなら、當然こうした他箇所の記述も、「四川唐大嫂」の着想を補强する働きをしているであろう。

蒙汗藥や薰香、いわゆる眠り藥や痺れ藥の類は嘉慶・道光以來の俠義小說にもよく見られるが、前述の『雍正劍俠圖』では、第十回で、四川劍山蓬萊島で淸朝轉覆を圖る英王が、側近の九尾金蝎道長の管轄下で薰香や蒙汗藥を調合させ、各省の綠林道の盜賊たちに賣り込み、その收入を軍資金としている、と設定されている。この設定はその後も繰り返し言及されるが、第四十一回では、九尾金蝎道長の配下の張老と楊氏夫婦が、薰香・蒙汗藥調合の藥材として男の胎兒の肝を取るため北京へ潛入し、妊婦を物色するくだりもある。

『國技大觀』（一九二四年）の「軼事類・拳師言行錄・任俠篇」にある「峨嵋盜」は、毒藥ではないが、四川の奇怪な藥が記述されている。以下要約する。

山東の某相國夫人が自室にいるところへ、軒先からひらりと飛び降りた八、九歲の子供がいる。可愛らしいので思わず抱き寄せようとすると、腕をすり拔けて逃げてしまった。夫人の腕からは腕輪が消えていた。夫人は盜賊を必ず捕らえよ、と縣令に命じる。すでに退職していた古株の捕り手が、これは四川峨嵋山の盜賊ではないか、と申し出て、峨嵋山への探索を命じられた。峨嵋山で出會ったきこりに案內され、盜賊の首領に面會すると、首領は腕輪の一件はほんのいたずらだ、奪った本人に返しに行かせよう、とて、赤髭の巨漢を呼んだ。捕り手は疑いつつも男を連れて歸途につく。縣令は犯人を捕らえたと聞いて喜んだが、子供とは似ても似つかない大男なので、執拗に尋問したところ、大男は、「うるさく聞くな。今から持ち主に腕輪を返してくる」と言って、ひらりと飛び出して行った。慌てた縣令は相國邸に傳えた。夫人は僕を集め自室にいたが、そこへ以前の子供がまた現れ、夫人の懷に腕輪を放り込んで姿を消した。捕り手が城外へ出ると、大男が待っており、暇を告げる。捕り手が、お前の大きな體を子供に變えるのは幻術か、と問うと、男は、自分たちは小さい頃から「縮骨丹」を服用して體を縮めることができるし、換形法を習って變身できるのだ、と語って去った。

本文末尾は「若其人者盗也而近於仙矣（この人のごときは、盗でありながら、仙に近い）」と結んであり、半人半仙の趣もあるが、それがさらに、特定の土地の特定の集團―峨嵋山の盗賊―の間で一種の慣わしのように共有されている、という發想は、四川唐門の設定を考える上で興味深い。「我輩幼服縮骨丹（我々は幼くして縮骨丹を服用する）」というのであるから、縮骨丹を服用する人々は、子供のころから峨嵋山でこうした異能を修練してきたのである。

四川は元來藥材の生産地、交易地として知られてきた。『雍正劍俠圖』第百十一回でも、「川中出産各種奇藥、毎年收入頗豐（四川では各種の奇藥が生産され、毎年の收入は頗る豐かである）」と描寫している。四川における藥材交易の市、卽ち藥市の始まりは、宋・高承『事物紀原』卷八に

唐王昌遇，梓州人，得道，號易玄子，大中十三年九月九日上昇。自是以來，天下貨藥輩，皆於九月初集於梓州城，八日夜，於州院街易玄龍沖地中，貨其所齎之藥，川俗因謂之藥市，遲明而散。（唐の王昌遇は梓州の人、得道して、號を易玄子という。大中十三年九月九日に昇仙した。これ以來、天下の藥賣りがみな九月初めに梓州城に集まり、八日の夜、州院街易玄龍沖地で藥を商う。ゆえに四川ではこれを藥市といい、明け方になって解散する。）

という起源傳承が見られるが、要するに重陽節を利用した市であろう。宋代になると、成都の藥市が全國的に名を知られるようになり、陸游も成都の藥市を訪れて、その賑わいを詩に詠んでいる。[19]

宋・張世南『游宦紀聞』卷二に、

犀出永昌山谷及益州。今出南海者爲上，黔蜀次之，此本草所載云。然世南頃游成都，藥市間多見之。詢所出，云「來自黎，雅諸蕃，及西和，宕昌」，亦諸蕃寶貨聚處。（犀は永昌の山谷および益州で取れる。今は南海産を上物とし、貴州、四川がこれに次ぐ。これは本草の記載に云うものである。しかし、わたくし世南は成都に旅行したおり、藥市でよく見かけた。産地を訪ねると、「黎州、雅州など諸蕃、それから西和、宕昌から來ます」という。ここも諸蕃の貴重な物産が集まるところなのである。）

というように、內外の珍奇な藥材が成都の藥市に集まった。

明清には、四川の藥材は廣東と竝んで「川廣藥材」と呼ばれて全國に流通し、外地の商人が地元と四川廣東を行き來して藥を仕入れ、巨萬の富を築くものもいた。

這人複姓西門，單諱一個慶字。他父親西門達，原走川廣販藥材，就在這清河縣前開着一個大大的生藥舖。（この人は複姓で西門、諱は慶の一字。父親の西門達は、もともと四川・廣州を往來して藥材を商い、この清河縣の役所前に大きな生藥店を開いた。）

（崇禎本『金瓶梅』第一回）[20]

かの西門慶も父親の代に川廣藥材の商賣で大もうけしたという設定である。小說の時代設定は宋代だが、本書の風俗が明代のものであることは、すでに知られる通りである。そして、「天下有九福，京師錢福、眼福、屏帷福，吳越口福，洛陽花福，蜀川藥福，秦隴鞍馬福，燕

趙衣裳福、美女福」（明・陳繼儒『書蕉』巻上[21]）と「藥福」を詠われる。

重慶もまた成都と竝んで藥材の重要な集散地であり、清の嘉慶ごろからは成藥舗が續々と開設され、藥材の交易とともに製藥も盛んになる[22]。

このように四川は古くから「藥」によって天下に名を知られてきており、珍奇な藥や毒藥もまた、「藥の都」の落胤としてついて回ったようである。

古くには宋・蔡絛『鐵圍山叢談』巻六に、

往時川蜀俗喜行毒，而成都故事，歲以天中重陽時開大慈寺，多聚人物，出百貨。其閒號名藥市者，於是有於窗隙閒呼「貨藥」一聲，人識其意，亟投以千錢，乃從窗隙閒度藥一粒，號「解毒丸」，故一粒可救一人命。夫迹既叵測，故時多疑出神仙。（往時、蜀川の風俗ではよく毒が用いられた。成都の故事に、毎年五月五日と九月九日に大慈寺を開き、多くの人が集まって、さまざまな品を商った。その中に藥市を稱する者がおり、窓の隙閒から「藥買わんか」と呼ばわる。その意味を悟り、すぐに千錢を投じると、窓の隙閒から藥を一粒渡す。「解毒丸」と稱し、一粒で一人の命が救える。神出鬼沒なので、神仙ではないかと多くが疑った。）

とある。藥の都にはまた毒藥も蔓延していた、というのである。

毒藥を四川の風土、習俗と結び付けて捉える傳聞は、時代が下っても見られる。清・兪樾『右臺仙館筆記』巻六に、蜀の茂州の「毒藥鬼」なる奇病の記載がある。茂州では街道に店を出し、旅人をもてなすが、對應するのはすべて婦女である。その婦女の中の美貌の者はつねに奇病にとりつかれ、地元ではこれを「毒藥鬼」という。毎年立春から立秋の閒、月の障りになると發作が起きる。腹が太鼓のように膨れ、皮膚が腫れ、目や口や十指の爪から黄水が流れ出し、夜になると熱が出てますますひどくなる。その人は密かに小さな竹筒を隱し持ち、兩親や夫にも知らせない。筒の中には様々な獸の毛を蓄え、その一本を摘むと、魂がその獸に化し、廣野に出て旅人を惑わす。たまたま膽力のある旅人がこれを打ち据えると、許してくれと哀願する。夜明け閒近になるとますます困り果て、自ら姓名や住まいを明かす。これを殺すと、病人は死ぬ。病人の體から出る黄水に少しでも觸れると、毒にあたり、病が移り、病人は少し藥になる。このため、この病人がいる家では決して食事をしないよう戒め、やむをえず食事をする場合は、赤銅を食器の中に置くと毒にあたらない云々。

病人が自らの病の毒で他人を害し、毒藥が傳染していく。一種の習俗と結びついた風土病である。蠱毒を思わせる記述であるが、兪樾は「異哉。此疾視粤之痲瘋、粤之畜蠱更有甚矣（不思議なことだ。この病は、粤の痲瘋や畜蠱を見てももっとひどい）」と記している。

これを見るに、比較の對象とされた廣東もまた、「川廣藥材」の一方の雄として藥材の生産地である。また、北京や江南から見れば、四川も廣東も遠い邊地であった。以下は推測であるが、舊派武俠小説は華北文壇（北派）と江南文壇（南派[23]）を中心に發展し、新派武俠小説は、香港と臺灣で發展したため、沿海部から遠く神祕的な藥の里四川は、神出鬼沒で閉鎖的な毒藥暗器の一族が住まう場所に最もふさわしかったのではないだろうか。

おわりに

現代武侠小説で廣く流布している「四川唐門」誕生の背景をまとめると、以下のようになる。

① 白羽が『武術匯宗』に着想を得て、いち早く『十二金錢鏢』に毒藥暗器の達人「四川唐大嫂」を登場させたと見られる。

② ただし、『武術匯宗』の四川唐大嫂の技は沙手であり、『十二金錢鏢』で四川唐大嫂のシンボルとされる暗器「毒蒺藜」は『武術匯宗』に見られない。

③ 『十二金錢鏢』に先立ち、評書小説『雍正劍俠圖』が練子錘の一種ではあるが、「毒蒺藜」を武器に用いている。また、四川で毒藥を製造する一門を登場させている。

④ 『十二金錢鏢』の連載と同時期に評書小説『三俠劍』が、毒藥暗器の名家錢家と蓋家を用いている。また、錢家の獨門暗器を「毒蒺藜」としている。

⑤ 四川は古くから藥材の集散地として知られ、仙藥や毒藥の傳承も豐富にあり、「四川唐門」へとイメージがふくらむには適した素地を持っていた。

武侠小説の誕生とともに、古めかしい侠義小説は「武侠小説の前身」という位置づけで前時代の遺産の域に入っていく。特に民國時期になって刊行された侠義小説は、確かに出來の惡いものも多く、ほとんど顧みられない。しかし、『雍正劍侠圖』や『三侠劍』に見るように、中華民國時期にも書場で侠義ものは語られ、口演が整理されて侠義小説として出版されていた。お上に對する忠義、亂賊の鎭壓といった侠義ものの古臭いスタイルからは脱却できないものの、多様な新しい趣向も取り入れ、武侠小説が發展する環境の一部を、武術解説書や武侠筆記と共に形成していたのである。一九一〇～二〇年代の武侠小説と侠義評書は同じ時代の空氣を吸っていた。近代大衆小説として成立した武侠小説と傳統的な侠義小説との本質的な差異を考えるならば、「武侠小説の前身」という小説發展史的な前後關係で捉えるのみならず、武侠小説と侠義小説の混在期における同時代の共有性から差異を考えていくことも必要ではないだろうか。

注

(1) 葉洪生「中國武侠小説史論」(『武侠小説談藝錄—葉洪生論劍』所收、一九九四年、臺灣聯經出版事業公司)は、「武林」の語を使い始めたのは、武侠小説作家の白羽としている。

(2) 一九五一年、中國が武侠小説を全面的に發禁處分としたことと、それと入れ替わるように一九五四年、香港で梁羽生が武侠小説『龍虎鬪京華』を發表し、戰後武侠の先驅けとされることから、一九五〇年代が新派と舊派の境目とされている。

(3) 引用は香港天地圖書有限公司本による。雜誌掲載年は、劉維群『名士風流—梁羽生全傳』(二〇〇〇年、香港天地圖書有限公司)による。

(4) ほかに梁羽生『雲海玉弓緣』第十三回(一九六一—一九六三『新晚報』に連載)では、腕の立つ女武藝者として「四川暗器名家唐賽花婆媳」の名が擧がっている。

(5) 出版年は、葉洪生・林保淳『臺灣武侠小説發展史』(二〇〇五年、遠流出版事業股份有限公司)による。

(6) この直前の部分で、「郭英揚道：『巫山幫是四川一個小幫會，不過名氣倒不小。你說得不錯，他們是以擅於使用毒藥暗器聞名江湖的。舵主是個女的，名叫巫三娘子。她的行事介乎正邪之間。』」と描寫されている。

(7) 葉洪生「末路英雄詠嘆調」(『武俠小說談藝錄—葉洪生論劍』所收、前出)

(8) 近代中國武俠小說名著體系本（一九八四年、臺灣聯經出版事業公司）による。

(9) 初版自序の日付は「丙寅孟春（一九二六年）」

(10) 葉洪生はこの部分の引用を、「五毒神沙手」ではなく「五毒神砂」としている。單なる誤植であるのか、同一のものと解釋しているのかは不明。

(11) 第十四回初出。山陽の彈指神通華雨蒼の得意技とする。

(12) 初版は一九一七年。

(13) 中編第三章「雜技概說」に「所謂雜技，卽係暗器」として、二十餘種の暗器を解說している。

(14) 葉洪生「末路英雄詠嘆調」によれば、白羽の小說に、「娥眉刺」、「子母鴛鴦鉞」、「金絲藤蛇棒」、「卍字梅花奪」などの獨特の武器が用いられており、大半は白羽の創作であると述べているが、これらの武器には『雍正劍俠圖』と同一あるいは類似したものもある。

(15) 學名「Tribulus terrestris」、和名「ハマビシ」。

(16) 『武術匯宗』：「練子錘爲雙數，每重一斤十二兩，有小毛冬瓜，熟銅所作，練長三尺五寸，以剛鏈所作，故打出無聲，腕肘上皆有皮套，打出卽收回，而尤記錘打悠勁也！」

(17) http://www.civillaw.com.cn/jszx/elisorcase（『中國民商法律網』）。【審判名稱】：張玉和等訴單田芳侵犯著作權糾紛案；【審判程序】：一審；【案件分類】：知識產權；【裁判文書字號】：（2003）朝民初字第24219號；【裁判文書類型】：民事判決書；【裁判時間】：二〇〇三年十一月二十日；【受理法院】：北京市朝陽區人民法院。裁判長は林子英、書記員は劉德恆と馬超。

(18) 『武術匯宗』初版自序：「是時餘於少林拳棒，略皆諳悉，然我國武術，高明儘多，每思繼續精進，以求深造，乃於無意中，遇杜師心五，時師已年逾半百，昔走鏢川黔閒」。

(19) 『戊午重九』、『初春懷成都』、『山村道中思蜀』など。

(20) 『新刻繡像批評金瓶梅』。詞話本にこの一節はない。改筆の際に、まさしく明代の社會事情を加えたものであろう。

(21) 明・謝肇淛『五雜俎』卷四にも同書が引用されている。

(22) 『四川省志・醫藥衞生志』第四篇「中西醫藥」第一章「中藥」。

(23) 北派の先驅は趙煥亭、南派の先驅は向凱然で、「南向北趙」と稱され、さらに北派は還珠樓主、白羽、鄭證因、王度盧、朱貞木ら、南派は顧明道、姚民哀、姜俠魂、文公直らを擁した。